

M Medical
Engagement
Relationship

ER

地域医療連携
だより



理念

患者と心が通い合う人間味あふれる医療人を育成し、地域との緊密な連携のもとで奈良県民を守る最終ディフェンスラインとして、安全で安心できる最善の医療を提供します。

1 奈良県民を守る「最終ディフェンスライン」の実践

奈良県内唯一の特定機能病院として高度医療・先端医療を推進します。また高度救命救急センターに加え、ER救急の整備等により救急医療体制を強化するとともに、奈良県基幹災害拠点病院として、奈良県民を守り地域の安心の確保に貢献します。

方針

2 奈良県内基幹病院としての機能の充実

5疾病（がん・脳卒中・急性心筋梗塞・糖尿病・精神疾患）をはじめとするあらゆる疾患に着実に対応するとともに、患者安全の取組を推進し、奈良県内基幹病院としての役割を果たしていきます。

3 地域医療機関との機能分担、緊密連携の推進

地域医療機関との適切な機能分担と緊密な連携を推進し、地域医療を支えます。

4 各領域の担い手となる医療人の育成

附属病院における卒後教育を通じて、超高齢社会に対応する地域包括ケアシステムをはじめ各領域の担い手となる患者と心が通い合う医療人を育成し、地域医療の向上に貢献します。

行動指針

- 病状や治療方針を分かりやすく説明し、安全で質の高い医療を提供します。
- 高度で先進的な医療を提供します。
- 医の倫理にしたがい、患者さんの意思と権利を尊重し、心の通い合う医療を提供します。
- 県における基幹病院として、地域の医療機関との連携を図り地域医療に貢献します。
- 臨床教育を充実し、人間味豊かで県民から信頼される優秀な医療人を育成します。

病院長 挨拶

奈良県立医科大学附属病院

院長 吉川 公彦



新春を迎えお祝い申し上げます。

日頃は奈良県立医科大学附属病院の運営にご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。

当院では2023年4月より患者さんの外来受診・入院・退院・転院・在宅医療をシームレスに支援する目的でこれまでの「地域医療連携室」と「入退院支援センター」を合併して「地域連携・入退院支援センター」と改名し、さらに新設の「在宅医療支援センター」を合わせて、「入退院等支援部」と組織の再編成を行いました。

MER (medical engagement relationship) だよりでは当院における初診紹介、逆紹介、退院調整、返書管理の実績、講演会開催予定等に関する最新情報や新任の先生のご紹介、各診療科、部門の取り組みを掲載し、地域医療連携に携わる皆様との、より一層の信頼関係の構築と円滑な連携を推進していきたいと思っております。

さて、当院では外来棟・医局棟・本部棟の老朽化、狭隘化に対応するため、2031年度の竣工をめざして奈良県・橿原市と協議の上、新A

棟建築と既存施設の移転・整備の計画を進めています。

新A棟の特徴は外来面積の拡充とデイサージエリー室新設、検査機能の集約化等による外来機能の充実に加え、臨床治験病棟、緩和ケア病棟の新設と新興感染症発生時の病床転換などフレキシビリティな構造を有している点です。さらに2030年度に完成予定の医大前新駅にも直結し、患者さんの利便性も向上が期待できます。

今後も当院は県内唯一の特定機能病院として、高度・先進・救急医療を担う基幹病院として紹介受診重点医療機関を標榜し、紹介率・逆紹介率の向上、連携登録医のつどい・地域医療連携懇話会等を通じた病診連携・病病連携の強化、地域医療機関との機能分担、緊密連携を推進し、地域医療構想の実現に取り組んで参りますので、ご理解とご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

リウマチセンターより ご挨拶



リウマチセンター
センター長 吉本 清巳

2024年10月1日より、奈良県立医科大学附属病院リウマチセンターが再開いたしました。当センターは、2011年から2021年までリウマチセンターとして稼働しておりました。その後、一時的にリウマチ外来として診療を行っていましたが、昨年10月より体制を整え、再びリウマチセンターとしての運営を再開しております。

リウマチ性疾患・膠原病が疑われる症例や、治療中の疾患や合併症に関してお困りの患者様がいらっしゃいましたら、ぜひご紹介ください。関節リウマチをはじめとするリウマチ性疾患・膠原病の治療は、近年の新しい薬物療法の登場により飛躍的に進歩しております。当センターでは、全国でも数少ない「整形

外科」と「内科（総合診療科および各専門内科）」が密接に連携して運営しており、併存疾患や合併症を抱える患者様に対しても、総合的かつ質の高い診療を提供しております。

さらに、リウマチケア看護師をはじめとする多職種が協力し、患者様一人ひとりに最適なケアをお届けする体制を整えております。地域連携室を通じて当センターにご紹介いただければ、症例に応じて整形外科医師または内科系医師が対応いたします。どちらにご紹介すればよいか迷われる場合でも、リウマチセンター宛にご紹介いただければ幸いです。

リウマチセンター 外来診察のご案内

		月	火	水	木	金
リウマチセンター		大野	赤井 (午前)	鮫島 (午前)	川島	松岡
			原		原	新名 (第2・4週 午後のみ)
					岡村	
					西村	
初診 外来	整形外科外来 【1階・13番】	—	原	—	岡村/西村	—
	総合診療科外来 【2階・65番】	担当医	担当医	担当医	担当医	担当医



Clinical Study of Artificial Red Cells starts in Nara Medical University Hospital

奈良医大 化学 教授

酒井 宏水

血液に含まれるタンパク質で、最も沢山あるのが酸素を結合するヘモグロビン(Hb)であり、Hbが如何に生命の維持に重要であるか想像できます。Hbは赤血球の中に濃度高く封入されており、赤血球が溶血してHbが漏出すると、様々な毒性を示します。最も沢山あるHbも、姿を変えると毒性を示すのです。

赤血球の代替物を人工的に創製できないか、世界中で多くの研究者が挑戦してきました。Hbのサブユニットへの解離を防いだり、重合したり高分子を結合させて粒子を大きくし、血管外漏出を抑制する試みがされましたが、Hbの毒性を完全に防ぐことは出来ませんでした。

我々が開発したのは、人工赤血球(ヘモグロビンベシクル)です。特殊な条件で精製したHbには最早、血液型物質が無く、またウィルスなどの感染源も排除しており、濃縮してリン脂質などから構成される脂質膜でカプセル化し、Hbの毒性を遮蔽できます。粒子径250nm程度の濃厚分散液であり、脱酸素化することでデオキシ型の紫がかった色調に変化し、長期間の保存が可能になります。

出血性ショックモデル動物に対する人工赤血球の投与で蘇生効果は、血液と同等であり、将来的に緊急時に輸血用血液の確保が困難な状況において、血液型の交叉試験をせずにいつでもどこでも必要時に安心して投与できるようになれば、離島・へき地医療、夜間救急、緊急手術の現場、プレホスピタルの現場、産科危機的出血の対応、さらに、大規模自然災害、テロ、有事の際の輸血用血液の大量需要に対し、効果を発揮するものと期待されます。

私がこの製剤の基礎研究に初めて携わったのは1991年、早稲田大学の大学院生の時です。それから30年以上が経過しました。その間、国内外の実に多くの先生方との共同研究を通して製造法、有効性、安全性を明らかにしてきました。

2013年に奈良医大に着任し、2015年からはAMED(日本医療研究開発機構)の支援を継続して受け、奈良医大で治験薬のGMP製造をすることができ、附属病院の皆様のご協力を得て、いよいよ治験の実施が具体化され、今後の展開に多いに期待をしています。

奈良医大附属病院で

人工赤血球の

臨床試験が始まる

附属病院 血液内科 教授

松本 雅則



「人工赤血球って何に使うのだろう」と思っておられる先生が多いかもしれません。海外では主として軍事目的に開発されており、歴史はかなり古く、わが国でも1980年代半ばには開発が開始されています。国内外で様々なタイプのものが開発されていますが、安全性などの面で真に実用化できている製剤はありません。奈良医大で開発されたこの人工赤血球は、健常人に投与するFirst-in-humanまで成功しており、世界の先頭を走っています。

当院においては、輸血部が血液センターから血液製剤を取り寄せ過不足なく供給するように努力しています。あまり知られていないようですが、一旦納品された血液製剤は返品ができません。そのため、過剰な在庫は期限切れの廃棄となり、病院の赤字となるだけでなく、無償の献血で提供された血液製剤を無駄にします。一方、血液製剤自体が足りない事態も生命の危機をもたらしますが、当院では数時間で製剤が届く恵まれた環境にあります。

今回我々が開発しようとしている人工赤血球は、血液型がなく、常温で2年間保存できるという特徴があります。ただし、当院でこの製剤の出番はほぼ無いと考えています。国内での用途として、災害時に電気が無い、道路が寸断されているなどの場面が考えられます。また、私は十津川村の診療所で4年余り勤務経験があることから、へき地・離島で常備することで役に立つ製剤であると確信しています。ドクターヘリ、ドクターカーでの利用も有望です。

今回この人工赤血球の投与量を増やした第1相治験を奈良医大附属病院血液内科病棟で行います。また、投与する製剤を作成するのがPC(cell processing center)ですが、こちらも輸血部で管理しています。私は、自分の管理している部署で製剤を作り、治験を行うという貴重な経験をさせていただきます。最終的には、この製剤が第2、第3相治験と進んで実用化され、発展途上国を中心とした多くの命が救える製剤になってくれることが私の夢です。



開催報告

第6回連携登録医のつどいを開催しました

— 開催概要 —

■日時 2024年11月14日(木)
14:00~16:00

■会場 奈良県立医科大学
蔵櫃会館3F 大ホール

— プログラム —

第一部

講演Ⅰ 「開業して30年を過ぎて思うこと
～かかりつけ医、病診連携など～」
医療法人優心会 吉江医院・歯科
理事長 吉江 貫

講演Ⅱ 「紹介患者の外来診療実績に基づく
動向について」
奈良医大 地域医療学講座
准教授 周藤 俊治

第二部 情報交換会

「連携登録医のつどい」は、登録医の方と当院医師とが緊密な医療連携を図ることで、患者さんがお住いの地域で安心して継続的に医療を受けていただけるよう、顔の見える関係を構築することを目的として開催しています。

今回は昨年度より始めたWEB配信を併用したハイブリッド開催といたしました。講演Ⅰでは吉江医院理事長の吉江 貫先生から、開業して30年一貫して患者さんの立場に立ち、行政をはじめ様々な機関との関係づくりに努め、地域に貢献することの大切さをお話いただきました。

講演Ⅱでは奈良医大地域医療学講座准教授の周藤 俊治先生から、実際の請求データを使った紹介患者の外来診療実績に基づいた動向について、医療情報の専門家ならではの視点からお話をいただきました。当日はWEBを含め総勢60名の方にご参加いただきました。講演会では質問が飛び交い情報交換会の時間が短くなるほどでした。



「今後は更に各診療科の魅力を配信し、医大に紹介してよかった、登録医になってよかった、とさせていただけるよう努力してまいります。お忙しい中ご参加いただいた皆様、ならびに開催にご協力いただきました皆様には重ねて御礼申し上げます。

今回も多数のご参加を賜り、ありがとうございました。

「第6回 連携登録医のつどい」
参加者アンケート集計結果は、
こちらから→→→



「連携登録医」の登録はお済みですか？

- 1 地域連携、病診連携、日常の診療に関する情報交換の機会となる「連携登録医のつどい」に参加いただけます
- 2 ご紹介いただいた患者さんのカルテ閲覧や入院中の患者面談等、患者さんの診療情報を共有することができます
- 3 定期的なメールマガジン発信により奈良医大の最新情報や各科、各教室の学術集会の参加案内などをいち早くお届けします。
- 4 登録医紹介患者さんに限り専用電話による直接予約が利用できます
- 5 患者さんから日常のかかりつけ医について相談があった際は、連携登録医医療機関を優先的に患者さんに案内、紹介いたします



当院では現在、連携登録医として418名の先生方にご登録いただいています。県内唯一の特定機能病院である当院と一緒に奈良県医療の地域連携体制の充実を図っていきたいと考えております。「連携登録医」についての情報や登録は当院ホームページ<医療機関のみなさまへ>から、または直接地域連携・入退院支援センターにお問い合わせください。

患者さまをご紹介の際は事前予約をお願いします

FAX 予約



専用FAX : **0744-23-9901**

受付:月~金 8:30~16:00 (祝日・12/29~1/3除く)
※ FAXは24時間受信可能ですが、時間外のお申込みは、翌日
(休日の場合は休日明け)の受付となりますので、ご了承ください

オンライン 予約



「C@RNA Connect」

※ 事前登録が必要です
24時間、365日予約可能で、予約枠の空き確認も可能

患者直接電話
予約



専用ダイヤルあり

※ 連携登録医の紹介患者さん限定



←←← 地域連携・入退院支援センター ホームページ



↑↑↑
登録医制度のご案内

オンライン予約
「C@RNA Connect」
ユーザー登録について
↓↓↓



初診紹介患者予約診療一覧表 →→→



編集・発行 奈良県立医科大学附属病院 地域連携・入退院支援センター

〒634-8522 奈良県橿原市四条町840

TEL (代表) 0744-22-3051/ (直通) 0744-29-8022

FAX 0744-23-9923 URL <https://hospital.naramed-u.ac.jp/>

発行 2025年2月